

## 【共同討議】

### カントをめぐる

京都大学名誉教授 富田恭彦

早稲田大学准教授 千葉清史

「超越論的な観念論」と銘打たれたカントの存在論や認識論は、その登場以来、様々な論議を巻き起こしてきた。その中には、「物自体と現象の区別は妥当か」、「空間・時間やカテゴリーは本当にアприオリなのか」といった、カントの立場の根幹に関わる論点も含まれる。これらは、「過去の哲学をどう解釈し評価すべきか」という思想史的な課題であることを超えて、それぞれの時代において、現役の哲学の問題としても真剣な議論の対象となってきた。というのも、カントの哲学を少なくとも部分的には継承しようとする「カント主義者」が、いつの時代にも存在していたからである。ちなみに、かく言う私も、そのようなカント主義者の一人である。

その意味で、カントの超越論的観念論が多重的な意味で機能不全に陥っていることを、カントをとりまく歴史的コンテクストを踏まえて明らかにすることを試みた、富田恭彦氏の、(タイトルも含めて) 刺激的な近著『カント哲学の奇妙な歪み』は、単なる思想史上の力作であるに留まらず、今日のカント主義者に対する挑戦状という、優れて現代哲学的な意義を持つ問題作であると言える。用意周到に準備されたこの挑戦状に、どのように応答するのか。これは、現代のすべてのカント主義者に突きつけられた課題なのである。

今回、カント主義者を代表して、富田氏の挑戦を迎え撃つ役を買って出られたのが、気鋭のカント研究者である千葉清史氏である。二人の論者は、上記の古典的な論点にも触れつつ、「カントの議論が当時の自然科学の知見に（そもそも、ないし、どのように）依存しているのかどうか」、「カントの議論の認識論的ステータスとは何か、それはアприオリなのかアポステリリなのか、それとも別の何かなのか」といった問題をめぐって論戦を繰り広げられる予定である。また「過去の哲学者の思想に対して、我々はいかに向き合うべきか」という、カントの解釈やカント主義の是非を超えた、より普遍的な哲学の問題も議論の的となるはずである。討議の行方は当日に俟つとして、以下では、現時点でのお二人のコメントを紹介しておきたい。

**千葉:**『カント哲学の奇妙な歪み』の基調をなすのは、カント哲学に対する富田氏の次のような診断である:『純粹理性批判』は、カントが表明しているのとは異なり、完全にア・プリオリな根拠から基礎づけられているわけではなく、むしろ当時の自然科学的知見を重要な論拠としている。

この批判的視座のもとで、富田氏のカント批判は大きく二部に分かれる。一つは、『純粹理性批判』における判断表ならびに諸「原則」(その具体例として「無限判断」と「経験の類推」が論じられる) のア・プリオリ性に疑念を提示するものである(第4章・第5章)。富田氏のこの批判に関して、私は特に異存はない。むしろ今日、判断表や諸「原則」のカ

ントによる導出は完全にア・プリオリなものであった、としてカントを擁護しようとする解釈者こそ——全くいない、というわけではないにせよ——少数派であろうと思われる。

富田氏の批判のもう一方（第1章ならびに第2章）に関しては事情が異なる。これは、いわゆる「物自体」をめぐるカントの考察が扱われる。そこでは、私が理解する限り、次の批判がなされる：(1)「物自体」は不可知であるというカントの見解は、デカルトやロックによって確立された「観念」の論理空間を——ちょうどバークリがなしたように——不当に歪めることに基づくものである。（この論点は、富田氏が、バークリ以降の観念論に特有なロック哲学の誤解として繰り返し論じてきたことであり、『カント哲学の奇妙な歪み』ではそれがカントの超越論的観念論に対して適用される。）その結果として、(2)カント哲学では、理論的存在を仮構する、という科学の基本的なありかたを受容できず、また、(3)（直観の多様を受容する）感覚器官について語る余地がなくなる。さらに、(4)カントは我々の感官を触発する物自体の存在を認めているが、因果性概念は現象にしか適用できないのだから、カントは本来物自体の存在を認めることはできないはずである。

これらの批判は、もしそれらが正しいならば、どれもカント哲学を根本から揺るがすものであり、カント研究者はこの挑戦を真剣に受け止めるべきである。私は本討議において、富田氏のこれらの批判に対して、カント的立場から応答することを試みる。

**富田**：私のカント批判に刺激的な質問と反論をお寄せくださった千葉氏に感謝したい。

かつて我が国でも『純粹理性批判』のカントの超越論的立論には「超越論的論証」という自己言及的（自己関係的）論理形式しか残らず、それすら問題があると論じられたことがあった（1990年代）。だが、なによりもまず、カントは、彼自身が専門常識としたものを含め、時代の文脈の中で批判的に理解される必要がある。千葉氏の質問と反論に対する私の応答が拠って立つであろう私の基本的視点は、次のとおりである。

原因と結果の関係の観念の核をなす必然的結合の印象がみつからないという心像論者ヒュームの見解に過剰反応したカントは、ヒュームが必然的結合を経験に基づく習慣によるものを退け、それを含む12の基礎概念を純粹知性概念として、アプリオリに知性に備わるものとした。経験は必然性を教えないと深く信じていたからである。しかも彼は、そうした純粹知性概念は、空間・時間という純粹直観形式とともに、その「胚芽」ないし「素質」がわれわれの心にもともと備わっており、感覚を機会（機会原因）として全面的に発現するという、言わば「胚芽生得説」とでも言うべき立場を採った。だが、「図式」論のカントの文言が示すように、実際にはカント自身も、経験が示すある種の規則性に依拠しなければ原因概念は適用できないとしており、その件に関する限り、そのアプリオリ化（内在化）にもかかわらず、結果的には彼の説はヒューム以上のものになりえてはおらず、またヒュームが心像論の立場からコピーしたロックの論以上のものになりえてはいない。

『純粹理性批判』に見られるカントの基礎理論には、これをはじめとするいくつかの重大な問題がある。上記の「胚芽」や「素質」の用法が発生学という自然科学に属する自身の見解に呼応することもその一つである。また、12の純粹知性概念の半分を占める「量のカテゴリー」と「質のカテゴリー」は、少なくともアリストテレスにまで遡り中世を経

て久しく ‘*quantitas extensiva*’ と ‘*quantitas intensiva*’ 等の名称で論じられ、近代に自然科学上の重要な区別とされつつあったものを意識した結果であったし、「関係のカテゴリー」が「質量保存の法則」、「慣性の法則」、「作用・反作用の法則」を下敷きとしたものであったことは論をまたない。カントは、『純粋理性批判』で行う形而上学(別名「純粋哲学」)の予備学としての営みは仮説的・経験的であってはならず、「明証必然的」(apodiktisch)なものでなければならないとしながら、実際にはこのように、さまざまな仕方で自身の自然科学的知見を基盤として論を展開している。その意味で、『純粋理性批判』の基礎理論は、彼の意図にもかかわらず、クワインの言う意味での「自然主義」的なものであった。拙著『カント哲学の奇妙な歪み』は、カントの超越論的観念論のそうした「隠れ自然主義」的性格の一端を、歴史的観点から明らかにしようと試みたものである。

このたび千葉氏は、拙著の特に第1章と第2章を取り上げてくださるが、そこで問題になる「物自体」も、古代からある自然科学的論理が近代に復活したことと深く関わる。その経緯を拙著 *Locke, Berkeley, Kant* (Olms, 2012; 2nd edn., revised and enlarged, 2015) 等に言及しつつ論じることにより、氏のご質問とご批判にお答えするよう努めたい。

出口康夫 (京都大学)